



平成十六年通常総会終了

義太夫

義太夫協会会報 第79号

平成16年8月1日

社団法人 義太夫協会発行
〒104-0061 東京都中央区銀座
4-13-11 文明堂3F
TEL・FAX (3541) 5471
<http://www.gidayu.or.jp>



開票風景

去る六月三日(木)に、築地社会教育会館において、定例の社団法人義太夫協会の総会が開かれました。各部より、昨年度の事業内容並びに決算報告、そして今年度の事業計画と収支予算の報告があり承認されました。又、今年は役員改選の年であり、新しく理事が選出され、次のとおり役員が決定されました。

波多一索(新理事)

監事

佐々木

田

明

郎

池

野

弘

一

館

澤

善

二

豊

澤

幸

治

豊

澤

源

平

鶴

澤

正

郎

鶴

澤

友

路

鶴

澤

津

寿

竹

本

寛

也

竹

本

素

丸

竹

本

土

子

竹

本

土

恵

竹

本

越

若

竹

本

越

道

竹

本

越

孝

波

多

綾

夫

竹

本

一

索

竹

本

弥

夫

竹

本

綾

助

竹

本

駒

助

竹

本

之

重

景

山

朝

隆

田

邊

正

雄

吉

川

英

史

最高顧問

名誉会長

副会長

理事

常務理事

監事

慶応大学文学部仏文科卒業。株式会社日本ビクター入社。ビクター音楽産業理事、(財)ビクター伝統文化振興財団理事長を経て、平成十年まで同顧問。文化庁芸術祭音楽部門審査員(平成七、八年)。

会長任期四期目を迎えて

社団法人義太夫協会会長

景山 正隆

本年は、(社)義太夫協会の役員改選の年に当たり、去る六月三日の総会において役員
の改選が行なわれました。私は、平成七年に
三代目会長に就任してから四期目を迎えるこ
とになった次第です。私も本年満八十二才と
いう高齢の身となりますので、退任のことも
考慮しましたが、諸般の事情により、とりあ
えず続投させていただくことになりました。
穏やかでない世界情勢の渦中においてわが
国の国情も予断を許さぬものがあり、義太夫
節のような、伝承者に限りのある伝統芸能の
継承・発展のためには、かなり厳しい状況に
おかれております。それだけに関係者一同力
を合わせ、積極的に継承と発展を期さなけれ
ばならないと思います。私も、微力ではあり
ますが、会長としての責務を果たして参りた
いと思っておりますので、ご協力のほどを宜しくお
願い致します。



正会員

TPOICS

ぎだゆう座初春公演

今年、特別版として一月十日(土)に、
お正月気分満載の公演を企画しました。
出し物は、「猿廻しの段」と「関取千両幟
―猪名川内の段―」の二番で、申年と会場とな
ったお江戸両国亭に因んだものです。
又、前日が大相撲の初日という事もあり、
永谷商事社長様のご配慮で、今回特別に相撲
協会の「ふれ太鼓」のご連中に来て頂き、大
いに会を盛り上げて頂きました。
お振るまいの樽酒も利いて?和やかな内に
終了しました。



五周年を迎えたぎだゆう座



乙女文楽との共演で「寿三番叟」

上野広小路亭で偶数月の一、二日に催され
ているぎだゆう座も五周年を迎えました。

ぎだゆう座は毎回テーマを設け、二日間通
して一つの作品に取り組み公演して参りまし
た。初年度は、池田弘一先生に解説を御願
いしました。次年度からは会員が交替で作
品についての解説や三味線の事等、それぞれ
の視点から解説にあたっています。

四月一日、二日、乙女文楽「ひとみ座」さ
んをゲストに迎え、五周年記念の会を催す事
が出来ました。

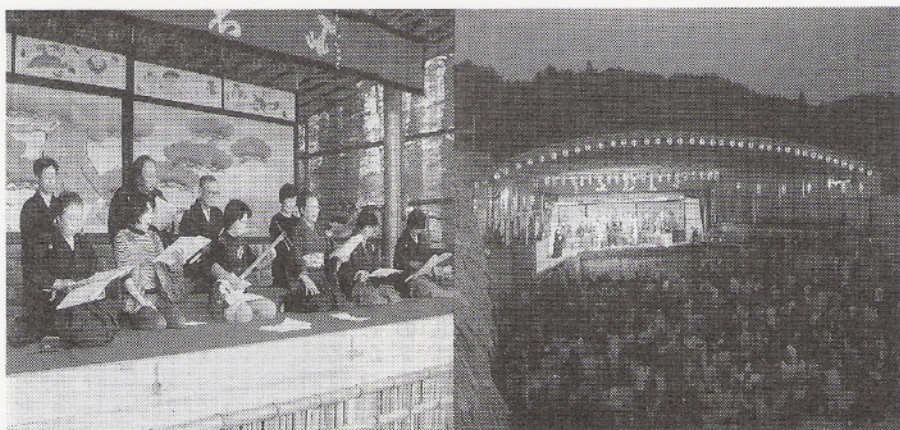
義太夫が地域の町おこしに貢献する！

この所、市町村における「地域づくり」の一環としての文化振興事業が、行政の援助を受けて盛んに行われています。協会では、義太夫節の普及活動として、地域からの要請を受け講師を派遣してきましたが、この度そうした市町村の中から二つの町が、歴史的資源を生かした地域づくりの功績を認められさまざまな賞を受けられました。

協会では、茨城県真壁町と大宮町の依頼を受け、平成十四年の初夏より今年三月まで竹本土佐恵を講師として派遣してきました。両町合わせて太夫十八名、三味線五名。二年半がかりで、六段の演目に取り組み、素浄瑠璃の発表会を催すにいたしました。演目は、「寿式三番叟」「傾城阿波の鳴門」「卅三間堂棟由来」「裏門の段」「寺入りの段」「車曳きの段」。出演者はもちろん、客席も共に熱気のこもった会になりました。その様子は地元タウン誌に、「浄瑠璃が農村にとって唯一の娯楽であり、楽しみでもあった時代にタイムスリップしたかのよう」と掲載されました。

又、その成果を生かし、大宮町では江戸時代から伝わる回り舞台（西塩子の回り舞台）を使った農村歌舞伎の再演、真壁町では「人形浄瑠璃真壁白井座」の復興を果しています。昨秋の「西塩子の回り舞台 第二定期公演」は、農水省主催「第三回むらの伝統文化顕彰」において農林水産大臣賞を、また、全国五十

八新聞社等主催の「第八回ふるさとイベント大賞」において大賞（総務大臣表彰）を受賞されました。
大宮町からは、協会あてに感謝のお手紙を頂きました。



回り舞台の公演前に素浄瑠璃の発表会。大宮町・真壁町合同。

文政年間の道具も残る組立式の「西塩子の回り舞台」。丸太200本と青竹300本を縄で結んだドーム状

真壁町からも暖かいお礼のお手紙を頂いております。指導にあたった講師の皆さんお疲れ様。受賞もさることながら、義太夫がこうして地域に根付いて、町の再生のお役にたっているとは有り難い限りです。



旗上げ公演
(真壁町総合福祉センターにて)

又真壁町でも、江戸の天明年間から伝わる人形浄瑠璃が、大正九年から途絶えていたが、本年三月に三業（太夫・三味線・人形）による第一回公演がおこなわれました。（人形指導は文楽協会の協力）。観客は五百人を超え、急遽追加公演をするほどの大盛況でした。町ぐるみのこうした取り組みに対し、総務省の平成十五年度「地域づくり総務大臣表彰」（活力ある町づくり部門）を受賞されました。

「賛助会員コーナー」

＊新年会開催さる／

正会員との親睦会を兼ね、去る一月二十一日に、上野広小路の放心亭で開かれました。カラオケあり、漫才？あり……の、盛りだくさんの楽しい会となりました。

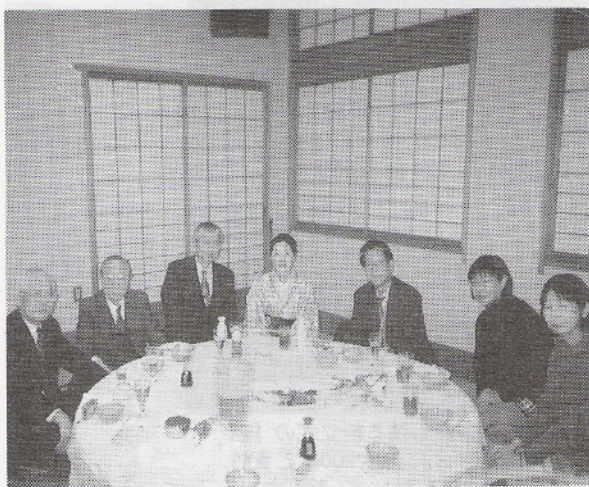
当日の発起人である、賛助会員の山田様にご寄稿頂きました。

義太夫への思い―新年会を開いて―

山田 浩三

義太夫が好きだ。家でも車の中でも毎日義太夫漬けである。太夫の語りが三味線の音が心を揺さぶる。義は礼に通ずというが、特に開幕の太夫三味線が肩衣をつけ居並ぶ姿は凛として美しい。日本の伝統芸能の中でも義太夫は白眉といつて良い。ところが、最近こんな義太夫の良さを理解しない人が実に多い。私が子供の頃は「そりや聞こえません伝兵衛さん」とか「三つ違いの兄さん」ととかいった言い方が日常的に使われていたのに、最近はそのほとんど聞かれない。寂しい限りである。でも、寂しい話ばかりではない。ここ数年、東京の文楽公演の異常なブームはどうだろう。チケットは即日完売でプレミアが付くという人気だ。つまり、古い芸能故に、人が離れるのではないのだ。人を惹きつける魅力

さえあれば、ファンはどんどん戻ってくる。協会に望むのはそのことだ。至芸を披露することは勿論、ファンを魅了する新しい試みにもどんどんチャレンジして頂きたい。昨年、6月ぎだゆう座で太棒で義太夫以外の曲を弾いたのも面白かったし、車人形、乙女文楽、子供歌舞伎等とのジョイントなども楽しかった。ファンはまた新しいファンへの呼び水。今回のファンとの交流企画としての「新年会」では会長を始め、理事正会員各位に多大の御協力を頂いたこと本当に嬉しかった。ファンあつてのプロ、プロあつてのファン、一致協力上野も国立も常に満員にし、義太夫の熱気を取り戻しませんか？



大日本素義会、八十回を迎える

浅草橋の鳥越神社にて、五月二十三日(土)に記念の会が催されました。番組は、計二十一番組―幕開きに駒之助師が「萬歳」を語り、花を添えました。

四十年以上の歴史を持つ大日本素義会ですが、年々新加入の出演者も増え、これからも春秋年二回のペースで開催する予定、との事です。益々の会のご発展をお祈り申し上げます。

尚、八十回記念として協会にご寄付を賜りました。いつも御後援頂き御礼申し上げます。

駒登久師逝く

正会員鶴澤駒登久師が、平成十六年三月十八日に亡くなられました。享年九十六才でした。

この十数年、舞台から遠ざかっておられましたが、現役当時は最高齢の三味線奏者として活躍されていました。初めは太夫で出発した為、語りにも精通し「はんなり」した芸風で親しまれていました。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。



突然逝ってしまった師匠

鶴澤 駒治

駒登久師匠の訃報を受けたのは三月十九日の夜でした。その日の昼間、女流義太夫のお客様に「師匠は高齢なので稽古はしていただきませんが、まだまだお元気なんですよ。」とお話し申し上げたばかりでしたし、亡くなる四日前には妹弟子の駒清とお宅に伺って三味線を聞いていただいたりしておりましたので、師匠が亡くなったということが俄には信じられませんでした。駒清への連絡の電話で悲しみが込み上げ言葉にならず、漸く伝えたものの涙が止まらず二人で長い間泣き続けてしまいました。

入門当初は何もわからないまま師匠の前に座って只々師匠の真似をしておりましたが、何回弾いても覚えてくれない弟子に困りながらも小さい溜め息をつきつつ何度も弾いて下さったことを思い出します。

また、私は会社勤めをしておりますので、師匠のお世話や用事を人並には出来ませんでしたが、新派の仕事の時には夜だけですが、一ヶ月間師匠のお世話をする事が出来ました。先代の綾之助師匠とうちの師匠で、新口村のサワリ部分を陰で演奏するというものですが、渋い中にも色気のある綾之助師匠の語りと、何とも言えず心に沁みるうちの師匠の三味線に魅了されたものです。その音色に一步でも近づくためにも、駒清と二人芸道に精進して参る所存です。

最後に、師匠の通夜・告別式は、定期演奏会の前日・当日であるにもかかわらず、大勢の皆様にご参列いただきまして、ありがとうございます。この場をお借りして御礼申し上げます。



— 略歴 —

大正 十年豊竹駒清に入門、豊竹駒登久となる

十三年浅草の東橋亭にて初舞台

昭和二十六年義太夫再開（戦争中は休業）

鶴澤三生に師事

三十一年本牧亭にて鶴澤駒登久に改名披露

四十九年社団法人義太夫協会理事

五十五年重要無形文化財「義太夫節」総合指定保持者

芸団協芸能功労賞

昭和六十三年勲五等瑞宝章

新しい稽古場決まる！

賛助会員の神田竹治様のご好意により、協会の稽古場として、二階建ての家をお借りする事になりました。

一階に三味線など備品を置かせて頂き、二階の間が稽古場です。

三月八日には、正会員二十名ほどが集い、賑々しく稽古場開きをしました。場所は、本郷二丁目。壹岐坂上の、古き良き時代の情緒漂うすてきなところです。

又、今年度から、教室の会場として、赤坂の豊川稲荷の中にある文化会館をお借りしています。

お役立ち情報

三味線の糸

三味線弾きが普段からお世話になっております「糸」。義太夫の三味線では現在も使用するのはいすべて絹糸を用いたものですが、これは一体どのようなにつくられているのでしょうか。

○生産地

三味線に限らず邦楽器の糸のほとんどは現在、琵琶湖北にあたる滋賀県伊香郡木之本町でつくられています。

江戸時代には京都や大阪が主な生産地でしたが、糸屋に奉公に行った木之本の人々が技術を持ち帰ったこと、木之本がもとと生糸の産地でその品質が楽器糸に適していたことから産業として根付いていったようです。

○「半生」と「セラシン」

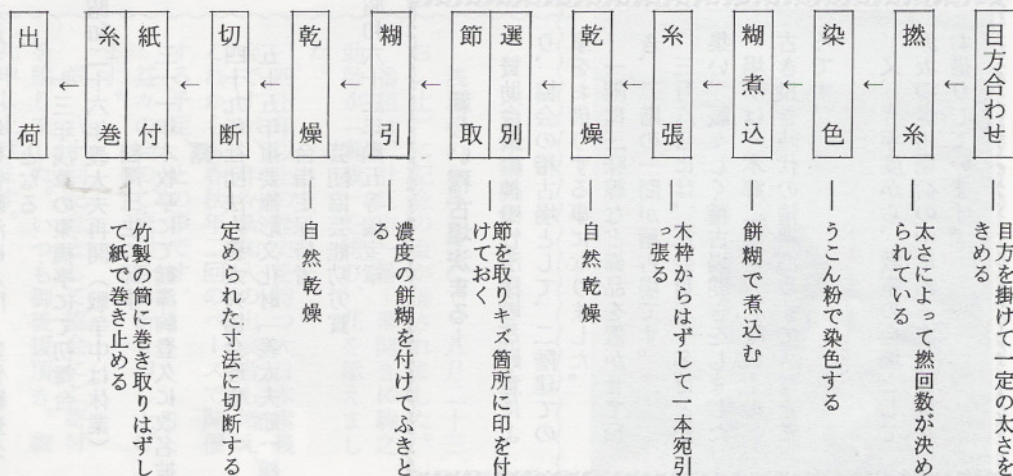
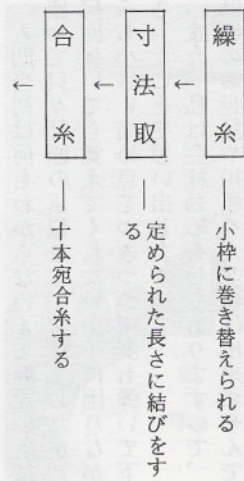
むかし、上がり糸(舞台で一度使用した糸)をほぐして織物に使った人がいたそうですが、そこまでの根性はなくても「絹糸」ということは衣類をつくるのと同じ糸?」というのは気になるところです。実際には違いはたくさんありますが、ここでは比較的わかりやすい2点を上げます。

まず、繭の段階での違いですが、衣類用の繭は120度の熱風で約6時間乾燥させ、品質を

安定させるために1ヶ月ほど貯蔵し、繭の中の水分を16パーセント以下にしてから使用します。それに対して楽器用の繭は炭で30分ほどいぶしたらそのまま、期間をおかず使用します。この繭を衣類用のものと区別して「半生」と呼びます。

次に繭を煮て糸としてほぐしていく段階での両者の違いは、糸の「セラシン」という物質に対する扱いです。繭糸は大きく分けると外側の「セラシン」と内側の「フィブロン」という物質から構成されています。楽器糸の場合は後の行程でセラシンが必要になるので糸取りの段階でこれが溶けすぎないように、湯の温度が80度くらいに保たれるよう水を入れて調整しながら作業します。これに対して衣類用の場合はセラシンが残るとゴワゴワして肌触りがわるくなってしまうので、湯の温度も高くした上にせっけん水なども使用してセラシンをすべて取りのぞき、フィブロンだけが残るようにします。

楽器糸製造工程

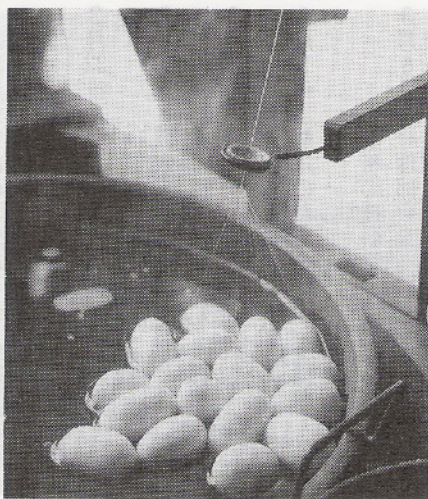


○ 7 円

現在では繭は長野県や岐阜県などから仕入れるようですが、その繭1つの値段が7円です。仕入れた繭は涼しい場所です。そうしないと蚕になってしまいうからです。

○ 原糸ができるまで

繭を煮てつくられた生糸(この作業は座繰りと呼ばれます)は工場へ運ばれます。ここでの最初の工程を「繰り糸」といい、生糸の束(総)から一本ずつ糸を取り、枠に巻きとっていきます。この作業を行う機械には、糸の「ふし」を取り除くためセンサーがついています。糸繰りした糸を5〜10本ずつ束ねて



80度の湯に浸る繭

枠に巻き取ることを合糸(ごうし)といい、この段階でできた糸が原糸です。

○ その後の工程

糸ができるまでには実に多くの工程を経なければならず、ここではとても紹介しきれませんが主な工程の名称だけ記してみますと、原糸ができたあと「寸法取り」→「目方合わせ」→「独楽撚り」→「染色」→「糊煮込み」→「糊引き」→「節取り」→「乾燥」→「切断」→「紙付け、糸巻」となります。このうち「独楽撚り」の前に糸を一晚水に漬け、手で叩きますが、この作業を経ることで生糸の段階で残しておいたセラシンの影響で粘着力が高まり、撚りやすい糸になるのです。

○ ウコン

糸の黄色は沖縄ブームですっかり有名になったウコンの色です。ウコンで染めるようになったのは防虫効果があることと、楽器との色合いがよかったことによるそうです。

三味線弾きは糸をととても大切にしており、舞台で使ったものは上がり糸として稽古で使い、使えなくなったものも集めてとっておき、ゴミ箱に捨てるようなことは決してしません。糸ができるまでの複雑な工程を知ると、改めてくれぐれも粗末に扱ってはならないと思いを新たにしました。

協会の動き

03年12月より
04年6月まで

普及部会 於協会資料室
邦楽会議 於サロンドサンク
日本芸術文化振興基金16年度助成
要請書提出
経理部会 於弥乃太夫宅
女流義太夫演奏会「仮名手本忠臣蔵」 於国立演芸場

12月2日 普及部会
12月10日 邦楽会議
12月10日 日本芸術文化振興基金16年度助成
要請書提出

12月15日 経理部会
12月22日 女流義太夫演奏会「仮名手本忠臣蔵」

12月26日 仕事納め
12月27日 普及部会
1月1日 会報第78号発行

1月5日 仕事始め
1月8日 義太夫教室新年稽古始

1月10日 「ぎだゆう座」 於吉水
1月19日 新年顔合わせ 於両国亭

1月20日 乙女文楽土佐市公演
1月21日 正、賛助会員新年会 於土佐市民会館他

1月26日 編集部会 於協会資料室
1月28日 芸能人年金30周年記念の会 於ルポール麴町

2月1・2日二日間「ぎだゆう座」 於ルポール麴町
2月15日 真壁町白井座義太夫教室 於上野広小路亭

2月15日 真壁町白井座義太夫教室 於上野広小路亭
於白井農村交流センター

2月18日	笠原牧子正会員資格審査	於竹本越道宅
2月19日	女流義太夫演奏会 伝承者研修発表会「野崎村の段」他	於国立演芸場
2月22日	義太夫節ワークショップ	於本郷つたや旅館
2月28日	義太夫教室OB演奏会	於東京証券会館ホール
3月1日・2日	「じよぎ」公演 二日間	於上野広小路亭
3月3日	都民のための邦楽演奏会	於国立小劇場
3月5日	事務局長会議	於芸団協会議室
3月8日	早川知恵子正会員資格審査	於弥乃太夫宅
3月10日	常務理事会	於保存会稽古場
3月22日	芸団協総会	於オペラシティ会議室
3月25日	新人奨励賞授与式	於国立演芸場
3月26日	女流義太夫演奏会	於国立演芸場
4月1・2日	「ぎだゆう座」二日間	於上野広小路亭
4月3日	一日体験教室	於豊川稲荷文化会館
4月16日	邦楽会議	於芸団協会議室
4月17日	義太夫教室第57期開講式	於豊川稲荷文化会館
4月21日	女流義太夫演奏会「妹背山婦女庭訓」	於国立演芸場
4月28日	公益法人制度意見交換会	於芸団協会議室
5月10日	経理部会	於弥乃太夫宅
5月17日	理事会	於弥乃太夫宅
5月22日	選挙管理委員会	於弥乃太夫宅
5月25日	女流義太夫演奏会「帯屋の段」他	於鳥越神社白鳥会館
5月26日	編集会議	於協会資料室
6月1・2日	「ぎだゆう座」二日間	於上野広小路亭
6月3日	平成16年度総会	於築地社会教育会館
8月21日	一日体験教室	於豊川稲荷文化会館
9月5日	駒之助の会	於紀尾井ホール
10月4日	祖先祭	於西国回向院
11月1日	朝重りさいたる	於ガスホール
12月11日	巴の会	於内幸町ホール
8月30日	女流義太夫演奏会	国立演芸場
9月26日		10月26日、11月24日、
12月16日	じよぎ	奇数月 各1、2日
ぎだゆう座		偶数月 各1、2日

これからの予定

【編集後記】

○編集作業は梅雨入りになりました。(T)
 ○編集部に入り3年経ちましたが、なかなか仕事のできる女になりません。(K2)
 ○見習い開始。(T2)
 ○同じく見習い開始。(K3)
 ○冬ソナで盛り上っている内に、早八月。
 現実生活も充実させねば。

(Y&K&S)

〈寄付〉

。出月清 人様 五万円
 。大日本素義会様 五万円
 。池田弘 一様(新年会に際して) 三万円
 〈寄贈〉

。上口 フジ様(故豊澤多美子さん御母堂)
 L Pレコード「近松門左衛門の世界」 ほか四枚
 。平田 智 恵様 三味線一式
 。鶴澤 慎 治様 上り糸

。望月隆太郎様(故鶴澤津賀昇師御子息)より稽古本、テープ(含オーブシリール)等段ボール六箱分送って頂きました。整理済みのものから御希望の方におゆずります。